

人間学を学ぶ月刊誌

[chichi]

致知

12 2018 December

おかげさまで
創刊40周年



〔特集〕

古典力入門

竹村亞希子 易経研究家
安岡定子 こころも論語塾講師 &

出口治明
立命館アジア太平洋大学
(APU)学長 &
数土文夫
JFEホールディングス
特別顧問

対談

こども論語塾講師

安岡定子

易経研究家

竹村亞希子

竹村亞希子さんと

安岡定子さんは、ともにその

内容の深さと分かりやすさで

定評がある古典指導の

第一人者である。お二人は

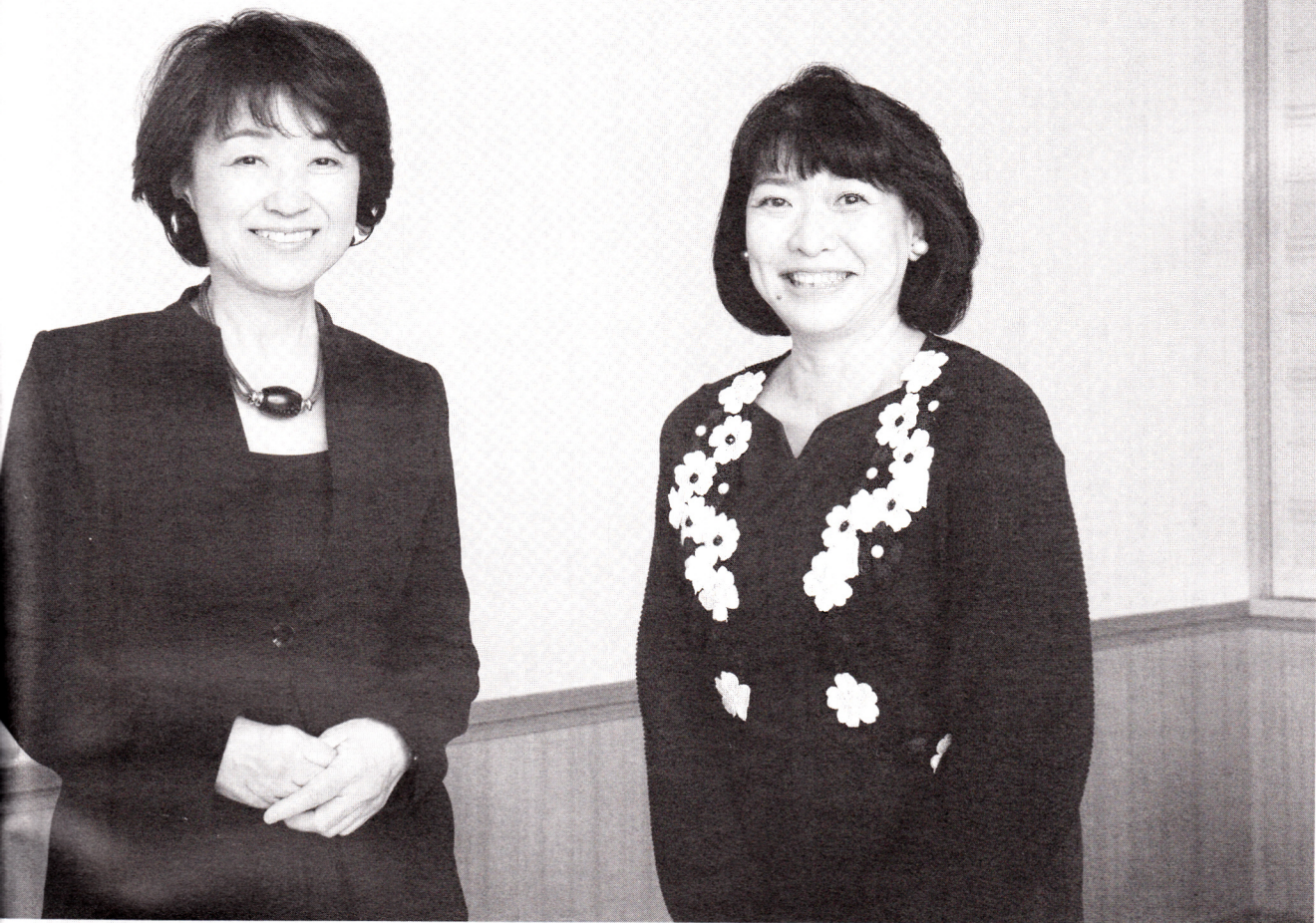
これまでどのように古典力を磨き、

またそれをどう伝えようと

されているのだろうか。古典の

魅力や学び方などを交えながら

お話し合いいただいた。



たけむら・あきこ——昭和24年愛知県生まれ。東洋文化振興会相談役。中国古典『易経』を占いでなく古代の叡智の書として分かりやすく紹介。易経全文を読むのに15年をかけるNHK文化センター名古屋教室『易経』入門講座は22年目に入る。著書に『人生に生かす易経』『易経一日一言』(編著)、共著に『こどものための易経』(いずれも致知出版社)『易経 陽の巻・陰の巻』(新泉社)などがある。

やすおか・さだこ——昭和35年東京都生まれ。漢学者・安岡正篤師の孫。二松學舎大学文学部中国文学科卒業。論語教室の第一人者として知られ、子供からビジネスマンまで全国各地で20以上の講座を受け持つ。主な著書に『楽しい論語塾』(致知出版社)『心を育てる こども論語塾』『実践・論語塾』(ポプラ社)『アスリート論語塾』(エクイネット)など。

こうして

古典力を磨いてきました

全国に広まっていった 論語塾

安岡 きょうは久々に竹村先生とお会いできるといので、とても楽しみでした。

竹村 私もです。安岡先生と対談できるなど願ってもないことで、喜んで名古屋からまいりました。それにしても先生の論語塾の広がりはずいすね。いまどのくらいこの講座をお持ちなのですか。

安岡 お子さんと大人のクラスを

合わせて全国で二十以上の定例講座を続けています。論語塾の講師になって十五年ほどが経ちますが、もともと講座を広めようとは全く思っていないでした。いま振り返ってみると、『論語』を求めていらっしゃる方が全国にこんなにも多くいらっしゃるのかと、驚いています。

竹村 私は『易経』を教えるようになって今年で四十年ですが、一

番多いのは官公庁や企業での研修や講演です。致知出版社さんの「易経講座」は受講生の皆様にも好評で、「分かりやすい」と喜んでいただいています。既に今年で七回を重ねました。NHK文化センター名古屋教室は二十二年目になります。この講座でのみ『易経』全文を時間をかけて読んでいるのでなかなか進まず、実はまだ二周目の半ばなのです。

定例講座は最近増えてきて、博多や盛和塾大阪、銀座や京都な

ど、十ほどになりました。古希を迎えて少し体が疲れる時もありますが、いつも楽しんでやらせていただいております。

先ほど、論語塾がいつの間にか日本各地に広まっていったという安岡先生のお話に、私は改めて古典の力というものを感じたのですが、もともとどういふ流れで論語塾は始まったのですか。

安岡 三十代の時、下の子が小学校に入って、もう一回古典を学び直したいと思って文京区民講座に

力が引き出され、自分で考えるようになると思います。教える側として、そこはとても留意する部分ですね。

『論語』にはある 万象の悩みの答えが

安岡 私は最近、「古典は自分が帰る場所である」という祖父の言葉をしみじみと実感することが多くなりました。古典から何を最も教わったかと聞かれたら、まずそう答えるでしょう。

しかし、若いお母様方や学生さんたちにとってどうかといえば、それはなかなか難しいところですね。苦難を避けたい、幸せな人生でありたいなど『論語』に求められるものは様々ですけど、一つ言えるのは、どう考えても苦難を取り除くことなどできないのが人生だということです。孔子ほどの人物でも長い不遇の時代があり、辛い思いもたくさん経験しているわけですから。

祖父は「万象の悩みの答えが『論語』にはある」と言っています。が、何事か起きた時に乗り越えることができる、どん底にある時に取り乱すことなく、じんわりじん

わりと心が癒やされて立ち直ることができ、その力を与えてくれるのが古典なのだと思うんです。

祖父は「人間、そんなに差なんかありませんわ」とよく言っていました。一人ひとりの能力に大きな差がないとしたら、困難にぶつかった時に、一緒に乗り越えていく仲間がいる、喜びや感動を分かち合える人がいるというののもとても大事な要素かもしれませんね。

竹村 私は古典を学ぶ楽しみは、自分の思い込みが外れて楽になり、自由な世界観が広がることにあると思っっているんです。

『易経』を学んだ方の中には「怖いことがなくなつた」とおっしゃる方が少なくありません。当然、生きていくと怖い現象は何度も起きてくるわけですが、『易経』には時中という、その時にピッタリのことをすれば物事は亨る、という解決策が具体的に書かれている。「不遇な冬の時代は避けるべきものではなく、春を迎えるための準備期間」と前向きに捉えることができるようになるんですね。

それを『易経』では「冬の大地に習いなさい」という言い方をしています。また来る春に備えて豊

かな土壌づくりをしなさいと。その発想を転換すると、「楽天知命」という『易経』の言葉の通りの不思議な安心感が生まれるのではないかと思います。

私自身も、過去にあった辛い出来事をあれこれ思い出して悶々としていた時「あつ、違うんだ。あれは本当はこういう意味があったんだ」と気づいて思い込みから解かれ、心が軽くなった経験があります。世界が広がり自由になる感覚をこの時、覚えたんですね。

志を立ててこそ 人間は大成する

竹村 安岡先生は『論語』の章句から特に好きなものを選ぶとしたら、何を選ばれますか。

安岡 なかなか難しいのですが、若い人たちに伝えたいと思うものをあえて選ぶとしたら最初は、「教育有て類なし」

を挙げたいと思います。人間に生まれつきの上中下といった種類などというものは無い。人はどれだけよき人物に出逢い、どれだけよい影響を受けたかによって、差が生じるという意味の章句です。二つ目は、

「道に志し、徳に拠り、仁に依り、藝に遊ぶ」

まず志を持つことが何よりも大切で、その志を遂げる時には、高い品性と正しい行いを忘れてはいけません。さらに思いやりや誠実さもなくてはいけない。その上で豊かな教養の世界を楽しむことが大切だ、という孔子の言葉です。

そして三つ目として孔子のこんな逸話を紹介したいと思います。魯の国の大夫がある時、孔子に「我が国はなかなかうまく治まらな

いが、悪い人間をすべて成敗し、よい人間だけを登用するのは、どうでしょうか」と質問します。孔子は「どうして人を殺す必要などあるでしょうか」と前置きした上で、このように述べるんです。

「君子の徳は風なり、小人の徳は草なり。草之に風を上うれば必ず偃す」

君子の徳は風のようなもので、よい風が吹いたら、草は皆そちらに靡くではないか、と。このように人を感化できるだけの徳を備えているのが本当の君子だと論ずわけです。強制しなくてもその人の存在そのものが周囲の人たちをいつの間にか変えていくという、私

がとても好きな孔子の逸話です。

竹村 人間には志が大事だという安岡先生のお話を伺いながら私は「確乎としてそれ抜くべからざるは潜龍なり」と

という『易経』の言葉を思い浮かべていました。「それ」とは志のこと。不遇な潜龍の時代こそしっかりと志を抱く。「すべては志に始まる」と教えています。潜龍の抱く志は、野心や野望とは異なり、社会に大きく貢献するための高い目標です。

私の講座を受けられた方が「私の人生は龍そのものでした」と話されるのがよくあるんですが、勢いよく活躍している人たちがすべて龍かといえば、実はそうではないのです。志を打ち立てて初めて龍として出発ができるわけで、

龍ではないものがたまたま時流に乗ったからといって、雲を呼んで雨を降らせることなどできません。誰にも認められない、無視されるような冬の時代に志を打ち立ててこそ本物の龍として出発できるという「確乎不拔」は私が『易経』

で最も好きな教えです。それから、

「平かなるものにして峻かざるは

なし」

これもぜひお伝えしたい言葉の一つですね。人間は調子のいい時はいつまでも安泰が続くという錯覚に陥りやすい。そうなると油断して、いつしか驕り高ぶりが出てくる。「このくらいなら」と贅沢を始め、それが積もり積もって変な方向へと進んでしまう。しかも、その過ちに本人も気づかない。つまり、調子のいい時こそ物事は必ず変化していくことを忘れるなという警告で、それを忘れなければ安泰を長く保てる。健全な危機感を持ってという教えなんです。

もう一つ、

「世に善くして伐らず」

という言葉最後に挙げたいと思います。これは、龍のように恵みの雨を降らせることができる人が、正しいことをしたから、あるいは世の中に役立つことをしたからといって、誇ってはいけないという戒めです。なぜかといえば、その人はそういう役割のために力を与えられているのだからできて当たり前で、もしできなかったとしたら逆に恥ずかしいことだと。ところが驕慢に陥って力のない人を不要だと切り捨てるようになって

てしまいがちです。これはとんでもない間違いだと『易経』は言っているんです。

人間力を高めるのに大切なこと

安岡 そのように考えると、人間謙虚に生きることがどれだけ大切かを改めて教えられますね。

古典は過去に編纂された書物ですが、今日まで読み継がれてきたのは、優れていて普遍性があるからです。古典に自分の生き方を重ね合わせて振り返る。これは大変意味のあることですし、そのためにも素直であり謙虚であるということとはとても大事だと思うんです。

さらにいえば、人間力を高めようと思ったら、自分の周りにいるよき人物から学ぶことも大切だと感じています。その人物がどのようにして人間を磨き高めてきたかを考えれば、そこには、きっと古典があるでしょう。だとしたら自ずと古典に関心が向くと思います。そして最後にはやはり読書の習慣でしょう。

竹村 私は自分は人間力がそんなに高くないと思っています(笑)。ただ『易経』が大好きで学んで

きたにすぎません。実際、『易経』は読めば読むほど面白いし、「こんな意味があったんだ」という発見が毎回のようにあります。

しかし『易経』を読む度に、できてない自分と対峙させられます。『易経』との対話なのですが、これがなかなか厳しいのです。

十年以上前から、ブログやフェイスブックで、『易経』一日一言や『易経』の言葉を毎日発信しています。その度に、否応なく自分を客観視させられます。自分がいかに不完全か、物事が分かっていたか、不完全か、物事が分かっていたか、毎回つきつけられるのです。四十年間も『易経』を学びながら、お恥ずかしい限りですが、不完全な小人の自分と、少しホメてあげたくなる自分とが混在しています。どっちも自分です。そんな自分を受け容れ、可愛がりながらも、『易経』によって少しずつ解放されていくことを味わって、楽しんでいきます。

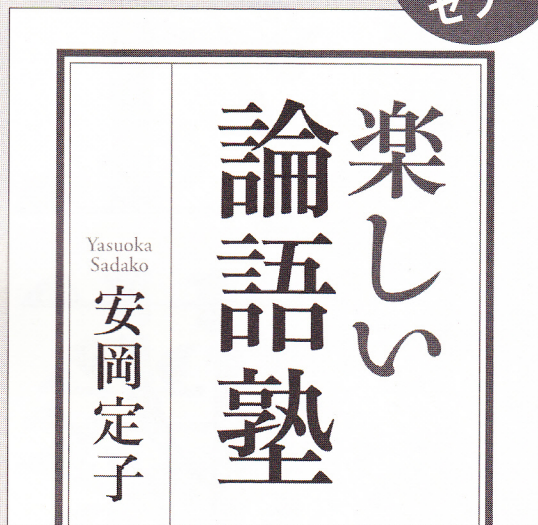
最近目は目の前で起きていることに、若い頃のように翻弄されずに、楽しめるようになりました。四十年間『易経』に慣れ親しんできたおかげでしょうか。ありがたいことだと感謝しております。

大人にも子供にも大反響!!

『論語』の指導で人気ナンバー1

全国20か所以上で
ひっぱりだこのカリスマ講師の
話には、子供たちは
目を輝かせて聴き入る。

話題の
ロング
セラー!



子どもが喜ぶ 論語の教え方

全国20か所以上でひっぱりだこ。論語の
カリスマ講師・安岡定子さんが教える
「子どもと学ぶ論語」の手引き書。

致知出版社



楽しい論語塾

安岡定子=著

定価=本体1,400円+税/四六判上製

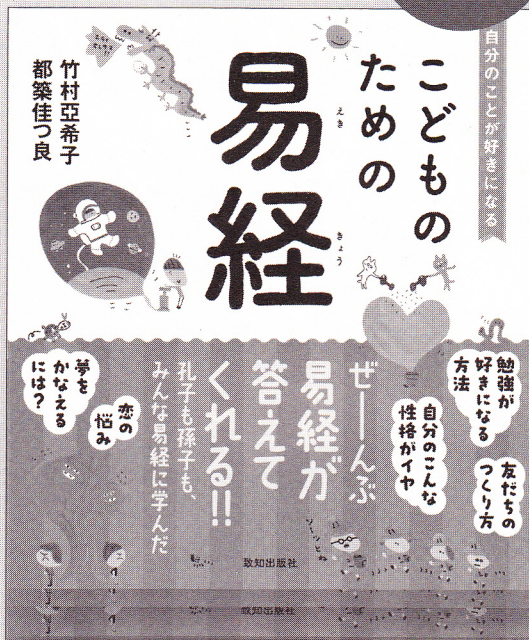


大人も熱心に聴き入る安岡定子さんの「論語」講義

子供たちの悩みにズバリと解決策を 示してくれる『易経』

漢字にはすべてふりがな付き、
全ページイラスト&やさしい訳と
解説でとても読みやすい!

プレゼント
にも
おすすめ!



こどものための易経

竹村亜希子・都築佳つ良=著

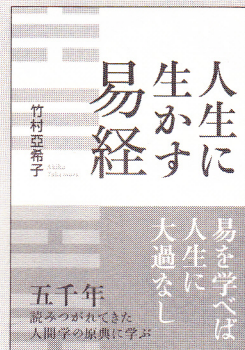
定価=本体1,500円+税/A5判変型



「易経」一日一言

竹村亜希子=著

定価=本体1,143円+税
新書判



人生に生かす易経

竹村亜希子=著

定価=本体1,600円+税
四六判上製

◎お求めは、巻末のFAX用紙または致知オンラインにて。
ご注文・お問い合わせは致知出版社 TEL03-3796-2118(直通)

致知オンラインで検索

カード決済可